

自 閉 症

1 自閉症とは

自閉症とは、多様な症状が認められる症候群で、3歳くらいまでに現れ、①他人との社会的関係の形成の困難さ、②言葉の発達の遅れ、③興味や関心が狭く特定のものにこだわることを特徴とする行動の障害であり、しつけや育て方などの環境的な要因によって起こるものではなく、中枢神経系の何らかの要因による機能不全があると推定される。

自閉症は、「知的発達の遅れを伴う自閉症」を自閉症と呼ぶ狭義的なとらえ方と、知的発達の遅れを伴わない「高機能自閉症」や、知的発達の遅れを伴わず、かつ言葉の遅れを伴わない「アスペルガー症候群」を含めて自閉症と呼ぶ広義的なとらえ方があり、高機能自閉症やアスペルガー症候群は、広汎性発達障害（PDD）に分類される。また、最近では、自閉症の概念を境目が明確でない連続体としてとらえ、「自閉症スペクトラム」と呼ぶことも多くなっている。

ここでは、「知的発達の遅れを伴う自閉症」について述べることとし、高機能自閉症（アスペルガー症候群を含む）については、別項で説明している。

2 自閉症の児童生徒の教育の場

知的発達の遅れを伴わない高機能自閉症等の児童生徒の多くは、小・中学校の通常の学級に在籍しており、その一人一人の教育的ニーズに応じた校内支援が推進されつつある。また、通常の学級に在籍している高機能自閉症の児童生徒で、情緒障害通級指導教室やLD等の通級指導教室で教育を受けているものもいる。

知的発達の遅れを伴う自閉症の児童生徒の場合、知的障害者を対象とする特別支援学校や、情緒障害特別支援学級、知的障害特別支援学級において、一人一人の障害の特性などに応じた、きめ細かな教育がなされている。

3 情報収集及び実態把握の視点

（1）対人関係や社会性

- 他人への関心が乏しく、かかわりを求めない、視線が合わない、呼んでも振り向かない、後追いをしないなどはないか。
- 他人への共感性が弱くはないか。
- 動作模倣が弱くはないか。
- ごっこ遊び社会性をもったものまね遊びをしないようなことはないか。

（2）言語やコミュニケーション

- 喃語、身振り、指さしの発達の遅れはないか。

- 話し言葉の発達の遅れはないか。
- 反響言語（おうむ返し）の時期が長くないか。
- コミュニケーション意欲に欠けるようなことはないか。

（３）興味・行動

- 横目を使って見る，手をひらひらさせる，身体を揺する，ぐるぐる回るなどの反復的又は常同的な行動はないか。
- 興味が狭くないか（常に水・砂などの感触を楽しむ，回転運動を楽しむなど）。
- こだわりはないか（道順，物の並べ方，数字やマーク，日課の変更，場面の転換など）。
- 臭いをかぐ，髪に触るなどの行動の特徴はないか。

４ 具体的な支援のポイント

- 自閉症の児童生徒は，正面から働き掛けると，相手の視線をきつく感じ，視線をそむけたり，すっとすり抜けたりなどの回避的行動がみられやすい。そこで，かかわりを成立させるために初めは横から働き掛ける。
- コミュニケーションレベルを把握して，実物，身振り，写真・絵カードなど，効果的な視覚的手掛かりを活用した分かりやすい指示や情報で伝える。
- 自閉症の児童生徒は，次々に変化する日課・場所は認知しにくく，安定しにくい。そこで，一日のスケジュールを実物，写真，絵カードなどで視覚的に提示して日課を見通せる工夫や，やることを見ただけで分かるような環境設定や課題の提示の仕方を工夫する。
- 自閉症の児童生徒は，人から「～される関係」はあっても，自分から人に「～する関係」がもちにくい。自分から他に働き掛ける関係を育てるために，自閉症の児童生徒の興味・関心を糸口にして自らの意思・要求に基づいて，自ら選択し行動することを目指す。
- 多動，寡動，自傷，他傷，パニック，破壊的行為などの「問題行動」は，どういう場面，どういう状況，どういうかかわり方のときに，その行動が起こってきたのかを探り，「問題行動」の中に発達要求を読み取り，それぞれに合った対応を考えていく。
- パニックをよく起こしている自閉症の児童生徒に対しては，事前に次の行動を予告する，立ち直るまで待つて自己復元力を育てる，自己選択場面を豊かに準備して育ってきている自我を発揮させるというようなかかわり方を心掛ける。
- 合併症として，特定の音や刺激に対する過剰な反応，睡眠リズムが一定しないなどの生理的不安定，パニック・自傷・他傷などを頻発する強度行動障害，てんかん発作などがある場合は，医療機関等と連携を図りながら指導を進める。